

藍住町のカリサオ

民俗班 (徳島民俗学会)

磯本 宏紀*

1. はじめに

藍住町では、唐竿は農作業の中でも重要な用具のひとつとして位置づけられる。藍住町歴史館「藍の館」の中庭の象徴展示として、唐竿による藍こなしを行う人物像が展示されていることから、藍住町における唐竿の位置づけは、重要なものであるといえよう。唐竿は、藍作の際の藍こなしの作業で使用されるほか、麦打ち、豆打ちなど、多用途に使用されてきた。現在、生産作物の変化とともに、唐竿の使用機会も激減している。

本稿の目的は、この藍住町で使用されてきた唐竿の形態、使用について、調査にもとづいたデータを提示するとともに、その特徴を指摘することである¹⁾。すでにほとんど使用されることなくなくなっている用具について、その現状を記録しておくことは急務である。

2. 呼称

先の記述では、「唐竿」と表記した。しかし、実際には多様な表記方法があり、テクニカルタームとしての表記方法には諸説みられ、固定したものはないといえる。徳島県における呼称として共通理解の得やすい「唐竿」という用語を便宜上使用した。

では、藍住町における唐竿の呼称どうだろうか。結論から言えば、「カリサオ」という表現が特化している。聞き取り調査中、「カリサオ」、ついで「カラサオ」という表現が混在しているように見受けられたが、共通に出てくる用語としては「カリサオ」

であった。したがって、以下カリサオと表記するものとする。

この点については、近隣地域の上板町でも「カリサオ」の呼称が確認できる²⁾。

3. 『阿州北方農業全書』におけるカリサオの表記

藍住町域を含む阿波北方の農業指導書の性格の強い農書として、江戸時代後期に書かれたとされる『阿州北方農業全書』がある。カリサオについては「藍作ニ付諸道具入用の事」³⁾として以下のように記述される。

- 一、から沢竹式拾本
- 一、から沢のぶち式拾
- 一、わらみ十五人前
- 一、竹の小笠拾五人前
- 一、藍こなしの節かや道具四つ
- 一、立ほうき三拾本
- 一、筵三百枚
- 一、大箕拾丁小箕拾丁
- 一、早魃の節水入候道具
- 一、たばこのくき

ここでは「から沢」と表記される。藍こなし用の道具として、「から沢」の柄部、打撃部をそれぞれ20本、したがって、「から沢」を20本用意する。それから、日除け用に15人分の箕と笠を用意する。これは作業にたずさわる人数分のことであろうか。そ

* 徳島県立博物館

のほか、注目すべきは筵を300枚用意するという点である。もちろん様々な用途での使用が考えられるが、「から沢」を用いた藍こなしの作業場で、地面に敷いて使用されたと考えられる。それだけの面積の作業場で、多くの人数をかけての藍こなしの作業が行われていたことを示していると推察できる。

藍作の作業の合間をぬって行われた麦こなしについて、同書に記述があるので以下に引用する⁴⁾。

手透見合天気宜敷節ほしからさを二而たゝき、
能実取候節かのほをこくほかき二而かき出し

よく晴れた日を見計らって、「からさを」で打って脱穀するようにとする。麦こなしについては、副次的扱いがされていることにも注目しておきたい。

なお、同じ農書中でも、「から沢」「からさを」の2種類の表記が登場することからも、明確な呼称の統一がなされていないことがわかる。

4. カリサオの形態

実測を行ったのは表1の4点で、いずれも徳命地区に集中することになったが、他所での聞き取り調査により、大きな形態的差異のないこと、近年における明確な変化がなかったことは確認した⁵⁾。

カリサオの形態について、3つの部位にわけて検討する。先述の『阿州北方農業全書』でも「から沢竹」と書かれる柄部と「から沢のぶち」と書かれる打撃部、それにその2本をつなぐ連結部の3部位である。実測、写真撮影をすることのできた4点の調

査資料について検討した。

打撃部はモウソウチクを縦に割り、4本束ねた形のものである。4本の割竹を結束する部分は軸部の1カ所のみであり、使用時には藁縄で結束する場合もある。打撃部の長さは91cm程度、No.4に関しては95cmと少し長い。

割竹の結束部は軸部へ差し込んだ箇所である。軸部と柄部との連結部分は、軸部の先端を薄く切り込み、その部分を曲げて軸を巻き込むようにして連結させている。したがって、使用時に打撃部を回転させる際は、軸と打撃部が一体となって回転させる。したがって、使用時の損傷がもっとも激しいのが軸部と柄部との連結箇所となる。回転の中心点となるためにもっとも負荷がかかる上、連結のために薄くして曲げ込んであるためである。

柄部は打撃部とは違うマダケ、ハチクを使用する。また、顕著なのは柄の長さである。柄の太さは軸部に近づくほど太く、逆に使用者の手元の方が細い。柄の長さは200cm強のものであり、No.3については特に長いものである。

5. カリサオ使用に関する記憶・聞き取り

藍こなしの作業はシンニワ（新庭）で行われた。通常のニワの面積では処理できないため、屋敷地内の使用していない畑や、屋敷近くの畑をニワとして整え、シンニワとして使用した。また、葉藍をそこに干した。それだけの面積を必要とすることからも、

表1 カリサオ計測値一覧表

No.	呼称	地域	打撃部長さ(cm)	打撃部幅(cm)	柄長(cm)	柄径(cm)	打撃部/柄比(%)	軸長(cm)	軸幅(cm)	打撃部形式	軸取り付け方
1	カリサオorカラサオ	藍住町徳命	91.3	4.8~7.1	200.8	2.8~3.0	45.47	17.4	3.0~4.7	竹条4連	巻き軸
2	カリサオorカラサオ	藍住町徳命	91.0	4.6~7.0	201.5	2.1~2.8	45.16	18.1	2.4~3.8	竹条4連	巻き軸
3	カリサオ	藍住町徳命	91.5	3.6~6.7	226.4	2.8~3.7	40.42	17.1	2.3~4.0	竹条4連	巻き軸
4	カラサオ	藍住町徳命	95.2	4.0~6.1	207.9	1.8~3.1	45.79	19.0	1.8~3.0	竹条4連	巻き軸

No.	打面積(cm ²)	全体重量(g)	打撃部重量(g)	打撃部素材	柄素材	軸材質	対象作物	使用者名	所蔵	備考
1	467.0	1200	550	モウソウ	ハチク	不明	藍、大豆、空豆、麦		近藤久之	2005. 10. 31実測
2	560.3	1160	540	モウソウ	ハチク	不明	藍、大豆、空豆、麦		近藤久之	2005. 10. 31実測
3	489.0	1280	550	モウソウ	マダケ	不明	藍、大豆、空豆、麦	安芸庄一	徳島県立博物館	2005. 9. 7実測
4	409.0	1130	630	モウソウ	マダケ	不明	藍、大豆、空豆、麦		藍住町歴史館 「藍の館」	2005. 7. 28実測、国指定重要有形民俗文化財「阿波藍栽培加工用具」の一部

※打面積= (打撃部1本あたりの幅) × (打撃部の軸以下の長さ) × (打棒本数) で最大予測値として計算した。

藍こなしは大がかりな作業であり、人数も要した。その頃になると、県南や讃岐方面からヒヨウサン（日雇さん）と呼ばれる出稼ぎ者を雇い入れる。その時期、ヒヨウサンは、屋敷地内の納屋で寝泊まりしていたという。

ところで、藍こなしが行われるのは、6月中旬の1番刈り後と、2番刈りの行われる8月中旬であった。暑い時期の作業であり、また、麦こなしの作業とも並行して行われた。

藍こなしは、天気がよく、風のない午前中に行った。風がある日の作業には、ボテと呼ばれる藁棒を使用したこともあったという。なお、作業中には藍こなし歌が歌われ、必ずカリサオを打つ人の中で中心となる歌い手がいた。歌の上手な者が仕事の良くてできる人と評価されたという。なお、今回の調査では藍こなし歌の歌詞については収集できなかった。

カリサオの入手方法については、自作されたものが多い。また、破損するたびに柄を何度も交換して使用しているという例もある。柄の長さは家により、また使用者により調整してつけていた。一方、例外的に昭和初期に農具市で購入したというケースもあったという。当時、何らかの形で流通していたことが考えられるが、この点については今後の課題として考えたい。

5. おわりに

今回の藍住町でのカリサオ調査について報告してきた。これにもとづいた藍住町のカリサオの特徴を3点指摘しておきたい。

まず、使用対象作物が多様であることである。藍住町に限らず北方方面において共通するのが藍作である。その作業行程で藍こなしに使用される点は大きな特徴であり、同時に多数の人により、比較的広い場所で使用されたものである。

2点目は、平均的な柄の長さが他の地域よりも長いという点である。この点では仮説にとどまるが、

筆者による県内各地での調査ではカリサオという呼称のつく藍作地帯のものは柄が長い傾向がある。

3点目は、打撃部が鉄に変化しなかったという点である。現時点での聞き取り調査で、少なくとも徳島県周辺域において明治末、大正につくられた竹条の打撃部の使用例が多いことは明らかである⁶⁾。また、県西部、山間部、讃岐全域と異なり、鉄製打撃部のものは確認できない。なお、先に挙げた『阿州北方農業全書』では「ぶち」と記述される。これについては材質、形態等検討が必要である。

以上、3点は他地域のデータとの比較により抽出した藍住町のカリサオの特徴である⁷⁾。今後は、こうしたデータをもとに、広域での比較の作業と、この特徴の要因の検討が必要である。

注

- 1) 本稿のもととなる実測調査及び聞き取り調査は2005年7月28、29日、9月7日、10月31日に行った。
- 2) 拙稿(2003)35頁、このほかに、徳島市北部、吉野川市美郷、石井町でもカリサオの呼称を、徳島市南部、那賀川町、小松島市ではカラサオ、池田町、東祖谷山村、那賀町木頭、木沢などではカラサオの呼称をそれぞれ確認している。どのような語彙分布域が現れてくるのか問題になろう。
- 3) 山田龍雄ほか(1980)、392頁
- 4) 山田龍雄ほか(1980)、400頁
- 5) 拙著(2004)でも報告しているが、打撃部に使用する材が、木から鉄へと変化した地域も確認できる。
- 6) 拙著(2004)、織野(2003)、六車(2003)などによる。
- 7) 拙著(2003)と極めて類似した事例が多く、形態、数値ともに近似のものであった。

文献

- 磯本宏紀(2003)：「カリサオ考—徳島県板野郡上板町での連枷調査より—」『民具集積』8、35～45頁。
- 磯本宏紀(2004)：「山間地で使用されるからさお」『徳島地域文化研究』2、110～121頁。
- 織野英史(2003)：「坂出市王越町木沢のカラサオ」『民具集積』9、71～76頁。
- 関東民具研究会編(1989)：『南関東のクルリ棒』関東民具研究会。
- 山田龍雄ほか編(1980)：『日本農書全集 10』農山村文化協会。
- 六車功(2003)：「香川県東部の連枷について—旧大川郡の調査事例—」『民具集積』9、63～70頁。

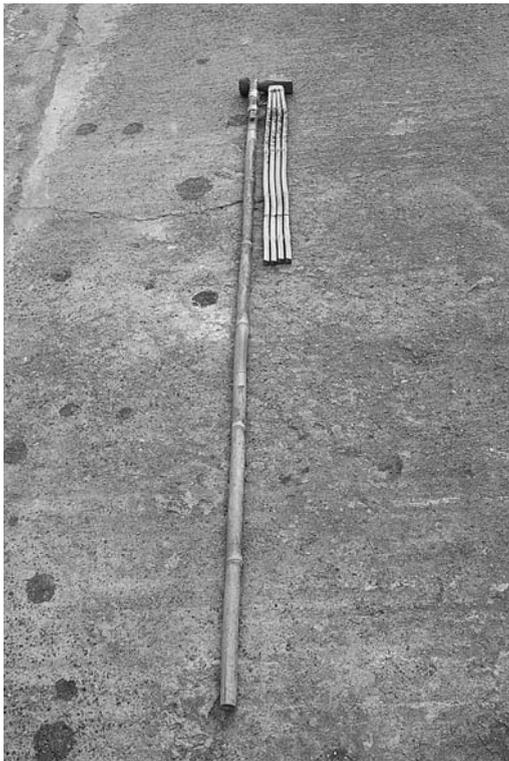


写真1 No. 1 のカリサオ



写真3 No. 3 のカリサオ

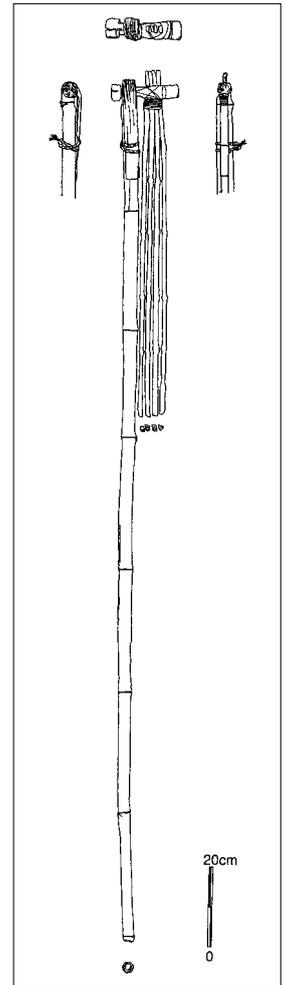


図1 No. 3 のカリサオ



写真2 No. 2 のカリサオ

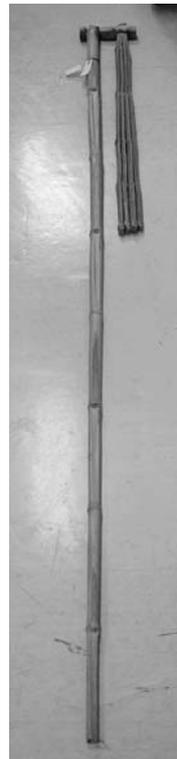


写真4 No. 4 のカリサオ